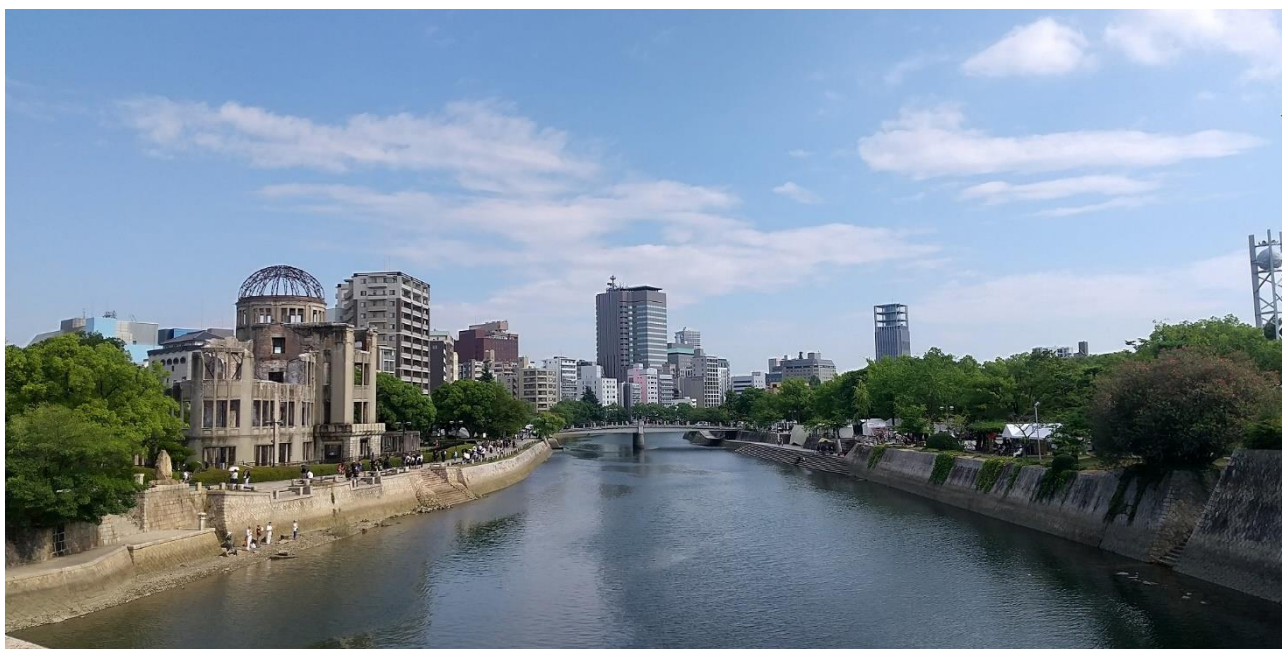


令和 7 年度

中学生広島市平和記念式典派遣事業 感想文集



相生橋から原爆ドーム・平和記念公園を望む



藤枝市
Fujieda City

藤枝市では、戦争を知らない若い世代に戦争の怖さや核兵器の悲惨さを直に知ってもらい、その体験を広く市民に広めるため、市内中学生を広島平和記念式典に派遣し、平和について考える機会としています。

原爆投下と終戦から80年となる令和7(2025)年は、市内すべての中学校より12名の代表者を派遣しました。

生徒たちが現地で学び、感じたことや、核兵器や平和に対する考えを書いた感想文を、文集としてまとめました。

令和7年度 広島市平和記念式典派遣中学生

学校名	氏名	ページ
藤枝中学校	大塚 優花 (おおつか ゆうか)	1
西益津中学校	渡邊 歩大 (わたなべ あゆと)	2
青島中学校	前嶋 琴美 (まえしま ことみ)	3
葉梨中学校	村松 律 (むらまつ りつ)	4
高洲中学校	鈴木 雄仁 (すずき ゆうじん)	5
大洲中学校	増田 陽向 (ますだ ひなた)	6
瀬戸谷中学校	小川 具哉 (おがわ ともや)	7
広幡中学校	八木 愛裕夏 (やぎ あゆか)	8
青島北中学校	原口 萌々果 (はらぐち ももか)	9
岡部中学校	横山 海里 (よこやま まいる)	10
藤枝順心中学校	加藤 優奈 (かとう ゆうな)	11
藤枝明誠中学校	坂井 祐斗 (さかい ゆうと)	12

私は8月6日、平和式典に参加しました。きっかけは、母が言った「静岡の子どもたちは、戦争についてあまり勉強しないんだね」という言葉からです。そこから、母の故郷である広島戦争について教えてもらい、もっと知りたいと思いました。

80年前・1945年8月6日、8時15分に原子爆弾は落とされました。何も普段と変わらない景色は一瞬で目を覆いたくなるような地獄と変わってしまったのです。あまりの高熱によって鉄のかたまりとなってしまったお弁当箱、持ち主が一瞬で蒸発し、影だけ残ってしまったコンクリート、私が想像していた戦争というものを超えていました。生き残った人も放射能により身体を自由を奪われ、大火傷により見るに堪えられない姿になってしまいました。

今では想像もつかないような悲惨な出来事が広島、長崎で起こっていたのです。これをきっかけに核を保有することにより相手国に攻撃を思いとどまらせることを理由に核を保有する国が増えてしまったのも事実です。

今も尚、戦争が行われている国はあります。日本は憲法第9条により戦争の放棄、戦力の不保持、交戦権の否認を定めています。私たち自身は経験していなくても、実際に起こった戦争、原子爆弾の投下によってたくさんのものを失ったことは決して忘れてはいけません。また、平和な世界、日々を作っていく為自らが行動する、語り継いで風化させてはいけないと思いました。

もう、二度と戦争なんて起こらないように。

僕は藤枝市の代表として広島市で行われた平和記念式典に参加しました。広島に行く前は戦争や原爆は「昔の出来事」「自分とは関係ないこと」のようにどこか他人事のように思っていました。

しかし、広島平和記念資料館を訪れてその考えが大きく変わりました。資料館には、被爆して亡くなった方の遺品や遺書、写真などが展示されていて、一つ一つから深い悲しみと苦しみが伝わってきました。例えば、焼け焦げた学生服や家族にあてた最期の手紙を見たとき、「この人たちも僕と同じように家族や友達がいて、普通の日常を送っていたんだ」と思い胸が苦しくなりました。「もし自分がこの時代に生きていたら」と想像すると、とても怖くなりました。友達と笑いあったり、家族と食事したりする日常が、ある日突然奪われる、そんなことが本当に起きていたのだと思うと、戦争を自分事としてとらえる事ができました。

また、式典や資料館には外国から来た人も多く、その中には涙を流していた外国人のおばあさんがいました。展示に書いてある説明文をスマホで一生懸命翻訳している姿を見て、国が異なっても、人種が違っても平和を願う気持ちは同じだと気付かされました。

さらに、平和記念公園の周りでは、小学生ガイドやボランティアをする人をかなり見かけました。また、2日目に訪れた全国こども平和サミットも同年代や高校生が主体となって企画運営する姿に、広島の人たちが年齢に関係なく平和を守り、伝えてるようにしている事に気付きました。

広島での経験を通して、平和は当たり前ではなく、先人達の努力と命によって守られているものだと思います。同年代が広島で平和について考えさせる活動をしているのを見て、僕にも「広島で見たことを伝えなければ」という使命感が芽生えました。戦争のない世界を実現するのは難しいと思っていましたが、広島の人々の活動に勇気をもらい、戦争のない世界は実現可能だと思います。小さいことから一つずつ取り組み、藤枝にも平和の輪を咲かせたいです。

私は、これまでに夏休みになると必ず放送される戦争の番組などは、怖くてみることができないと避けて過ごしてきました。しかし、今年戦後80年を迎えることを知り、戦争について改めて考えてみたいと思いました。

初めて訪れた平和記念資料館で目にしたのは、どれも想像を絶する悲惨なものばかりでした。多くの人々の命を一瞬で奪ってしまったものが、長さ3m、直径0.7mの小さな原子爆弾だったと知り、なんて恐ろしいのだろうと思いました。また、資料館には小さな子どもの話もあり、私より小さな子たちがこんなにも怖い思いをしたのかと思うと、言葉を失いました。こんなことが本当に80年前の日本で起こったとは、とても信じられませんでした。

また、原子爆弾が投下されてからわずか3日後には鉄道が通ったと聞き、とても驚きました。何もなくなってしまったところからの広島復興は、想像以上に早かったです。しかし、被爆された方は、当時小学校1年生だった時のお話を昨日のこのように詳しく話してくださいました。私は、心の傷や苦しみをずっと味わいながら生きてこられたんだなと思い、とても切なく悲しくなりました。戦争で受けた建物などの被害は、すぐに元通り、そしてそれ以上に発展していきます。しかし、心の傷は、生きている限り癒えることがなく決して元には戻ることはないということを知りました。

今回、戦争について学んだことにより、戦争は二度とあってはならないと強く思いました。今年の平和への誓いにあった、学んだ事実思いを込めて伝えれば変化をもたらすことができる”one voice”。私が、この広島で学んだことを家族、そして友人に伝えることもまさに”one voice”。過去の戦争を風化させないこと。そして私たち一人一人が、身近な人を大切に思う、優しく思いやること、その小さな思いがまずは平和への第一歩になるのではないかと思います。

75年間、草木も生えないと言われた広島。今回、私たちは原爆投下から80年という期間に起こった惨劇と復興の過程を体験してきました。

まず、私たちは広島平和記念資料館に行きました。そこで目にしたのは、すべて私にとって衝撃的なことばかりでした。1945年8月6日の午前8時15分、広島に原子爆弾リトルボーイが投下されました。資料館で見た写真には、熱線によるヤケド、熱風による家屋の倒壊、その場では生き残れたとしても、放射能による白血病・脱毛・出血など健康への影響が出るのが写されていました。それを見て、原爆は落とされた時だけの被害ではなく、一生の被害であるということを知りました。75年間、草木も生えないと言われた広島で一番に咲いた花、「キョウチクトウ」。この花は当時復興に懸命の努力をしていた市民に希望と力を与えたそうです。私はこの先、キョウチクトウを見るたびに広島のことを思い出すでしょう。

次に私が参加したのは、被爆体験朗読会です。その中で、一番心に残った詩を紹介します。当時小学3年生だった坂本はつみさんが書いた「げんしばくだん」という詩です。

げんしばくだんがおちると
ひるがよるになって
ひとはおばけになる

これを聞いて最初に感じたことは恐怖です。私がこの詩を聞いただけで恐怖を感じたということは、被爆した方はもっともっと怖い思いをしたということだと思います。このたった3行という短い詩には、当時の辛い気持ちや悲惨な情景が込められていると感じました。

最後に全国こども平和サミットに参加しました。そこでは学校や地域で行っている原爆に関する取り組みの紹介や、被爆した方の話を聞くことができました。被爆した方は、ご自身が原爆で家族を失った悲しみや原爆が落ちてからの生活についてなどをお話ししてくださいました。実際に体験した方の話はどれだけ辛かったかということがひしひしと伝わってきて、原爆の残酷さについて考えさせられました。

原爆投下から今年で80年。原爆について語るができる方も少なくなってきたと聞きます。今現在も、世界で戦争が起きている地域があります。被爆した人たちの平和への思いや祈りを後世に伝えていくことが、今回の体験で被爆者の話を直接聞くことができた私たちにできる「平和への道」なのだと思います。

被爆体験の方からお話を聞いているときや広島平和記念資料館を見ているとき、自然と涙がこみ上げてきました。原爆投下という事実について、興味があって少しは理解していました。しかしそれは、僕が想像した被爆体験者よりもずっと恐ろしく、悲惨なものでした。

被爆体験者の方からのお話では被爆当時、原爆投下を体験した人々の心の声を生で聞くことができました。その声は強く心の中に響いてきました。広島平和記念資料館を見学した中で一番印象に残っているものは「人影の石」です。そこで亡くなった人は悲しんだり寂しいと思ったりする間もなく亡くなったのだと思いました。

人々の生活の中での幸せや命は原爆投下によって、一瞬で奪われたのだと知りました。また、生き延びたけれども後遺症に苦しみ、死んだ「禎子さん」の資料も印象に残っています。十分な治療を受けることができず、食べ物すらも最終的には食べることができませんでした。想像できないほど痛くつらかったのだと思います。考えるだけで胸が痛くなりました。

今年で原爆投下から80年がたち、日本では平和が続いています。諦めずに原爆投下について伝え続けてきてくれた方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

ぼくたちと同じような人が無差別に殺された原爆投下を決して繰り返さないために、ぼくたちも同じように次の世代へと記憶をつないでいかなければならないと感じています。

今回の貴重な体験を家族や学校の友達などの身近な人へとまずは伝えて、核のない平和な未来の世界のために少しでも貢献できるように行動をしていきます。

一瞬の閃光。何もかもを焼き払う熱線と爆風によって、80年前の広島は一瞬にして地獄と化しました。皮膚がただれ、体は原形をとどめず水が欲しいと云う人々。その日の出来事を知って地獄は地上にもあるのだと知りました。地獄と違うとすれば、何もしていない人々がその被害を受けたことだと思いました。

僕が広島に行こうと思った理由は2つあります。1つ目は、原爆の恐ろしさ、「平和のための科学」とは何かを学びたかったからです。2つ目は「知る」という点です。この原爆の被害を知ってたくさんの人に話すことが大切だと思ったからです。

まず、資料館では原子爆弾が「兵器」だということを強く感じました。特に、この兵器の特徴である放射線について学ばなければと思いました。放射線は染色体を破壊し、細胞を殺すそうです。それを聞いた時、ひどく驚きました。放射線が人を殺すほどとは思っていなかったからです。また、放射線＝悪というわけではなく、僕たちも毎日少しの放射線を受けていることを知りました。悪にしてしまうのは人です。改めて科学とどう向き合うのかを考えていきたいと思いました。

次に印象に残ったのは、原爆の被害の大きさです。想像以上に広い範囲に及び、広島を燃やし尽くしました。3000度以上の熱線によって人々がどうなったかは、容易に想像できました。僕たちは「人影の石」を見ました。それは人が座ったところだけ黒くなっており、その周りは熱線で焼かれ白くなっていました。そして、爆風は鉄筋コンクリートの建物の窓を破壊し、その威力は建物の中にいた人も吹き飛ばすものでした。

僕が広島で強く思ったことは「こんなことは二度と起こしてはいけない」ということです。普通に暮らしていた人が沢山亡くなり、日常は一瞬で消え去りました。今すぐ世界から戦争をなくすことは難しいかもしれませんが、でも、いや、だからこそ、平和な未来のため僕が広島で見て感じたこと、原爆の悲惨さを多くの人に伝えていきたいと思います。

自分が立候補した理由は、戦争に興味があり、勉強したいと思って立候補しました。

実際広島に行かせていただき、原爆ドーム、広島平和記念資料館の見学に足を運びました。その中で私が心に残ったのが、「8月6日の惨状」というものです。そこには、原子爆弾が広島市中心部の上空600メートルで炸裂し破壊的な被害を受けたときの衣服や家の壁などが展示されていました。最初生々しくまっすぐに展示物を見ることができませんでした。でも広島に何が起こったのか、大火傷を負った人、命を落としてしまった人達の心、魂の叫びを知るべきだと思い真っ向から見ることができました。同時に原子爆弾の恐ろしさも知りました。

2日目の平和記念式典では、平和への誓いで、「いつかはおとずれる、被爆者のいない世界」という言葉に強く胸を打たれました。あと何年たつと被爆者がいなくなる世界になってしまうのだろう、戦争を体験していない私達はどうやって風化させずに維持させることができるだろうか考えました。自分が広島で体験したことを伝え広めていきたいと思いました。「たとえ一つの声でも学んだ事実を思いを込めて伝えれば変化をもたらすことができるはず」という言葉に、私も平和のために行動したいと思いました。

広島平和都市記念碑に「安らかに眠って下さい 過ちは繰返させぬから」という原爆犠牲者の冥福を祈った碑文にも心を打たれました。

この広島での1泊2日での中学生派遣で学んだことは一生忘れず、戦争という過ちを再び繰り返さないようにするのが今、現在生きている私たちの宿命だと思います。

あなたの思う平和はどのようなものでしょうか？その平和は永遠に続くと思いますか？

1945年8月6日 8時15分。

今から80年前に広島へ原子爆弾が投下され、約2キロメートル以内の地域で今までであった日常生活がたった一瞬にして破壊された。

当時の様子や平和の大切さ、核兵器の怖さなどを平和記念公園にある平和記念資料館、8月6日に行われた平和記念式典を通してたくさんのことを学んできました。

平和記念資料館では、破れてボロボロになってしまった子供用の服、8時15分で止まっている時計、原形をとどめられていないほどドロドロに溶けてしまった人々の写真や原爆によって死亡した人の死亡診断書など、たくさんの当時の様子を表す展示品があり、どれも残酷さを体現していました。被爆時のその残酷さは、私の戦争についてもっと深く知りたいという軽い考えでは到底想像もできないものだと思います。

今ある平和な日常生活がたった一つの原子爆弾でなくなってしまった。今、当たり前だと思っている日常はどれも当たり前ではなくいつまでも永遠に続くという保証もありません。私は普段の平和な日常や生活は昔の人たちのたくさんの苦労やたくさんの犠牲があったからあるものだと思います。だからこそ今の生活は当たり前などではなく、幸せなことだと思うことが大切です。

ですが今、そんな幸せは壊され、なくなり、また同じように残酷なことが繰り返されようとしています。同じことが繰り返されないよう、私たちは今ある平和に感謝をし、家族や友達を通して未来へ伝えていく。これがまだ子供である私たちにできることのひとつではないでしょうか。

1945年8月6日午前8時15分、広島に人類史上初の原子爆弾が投下されました。80年前のことなので、もちろん私は生まれていません。だからこそ、自分たちが原爆に対しての意識を変えたいと思い、参加しました。そして、今回私が、戦争は二度としてはいけないんだと感じた瞬間が3つあります。

1つ目は広島平和記念資料館を訪れたときです。当時の悲惨さや核兵器の恐ろしさが伝わりました。また、被爆体験朗読会で、原爆詩の朗読を聞きました。たくさんの詩の中で強く印象に残った詩は、「げんしばくだん」という詩です。

「げんしばくだんがおちると ひるがよるになって ひとはおばけになる」

この詩から、原子爆弾が落ちることにより、昼みたいな明るい景色が一瞬にして夜みたいに真っ暗になり、人間は皮膚がたれ下がり、おばけのように歩いていることが読み取れます。原子爆弾の破壊力は恐ろしいなと感じました。

2つ目は広島平和記念公園を訪れたときです。そこでは、原爆のことについて説明して下さるボランティアの人から記念公園のことについての説明を聞きました。今はとても綺麗な公園ですが、昔は残酷な姿だったとおっしゃっていました。全く想像が付きませんでした。ですが、昔の状況を少しでも知れてよかったです。

3つ目は、平和記念式典に参加したときです。私は、平和の誓いが一番心に残りました。

「記録として被爆者の声を次の世代へ語り継いでいく使命が私たちにはあります」

この言葉に、これからの自分たちがすべき行動に気づきました。戦争を体験していないから関係ないと思わず、一人一人が原爆の事実を受けとめてほしいと感じました。原爆は命だけでなく、未来や多くのものを奪う恐ろしいものです。大人だけでなく、子どもである私たちが、二度と同じ過ちを未来に繰り返さないために広島の歴史を後世に語り継いでいくことが大切です。なので、平和を創り上げていくと共に、原爆や平和について共有していきたいです。

先日、藤枝市の代表として参加した広島での平和学習は、私にとって忘れられない経験となりました。原爆の悲惨さを物語る写真や展示物の数々は、目を背けたくなるほど衝撃的でした。爆心地に近い場所で、一瞬のうちに多くの命が奪われたこと。そして、奇跡的に生き残っても、原爆病という病に苦しみ、命を落とす人々がいたこと。こうした事実を目の当たりにし、原爆が非人道的な兵器であり、人類と決して共存できないものであることを痛感しました。

平和学習を通して、私は当時の人々の命の価値が軽んじられていたこと、そして命の尊さを改めて学びました。この経験をただの思い出で終わらせるのではなく、私自身の言葉で多くの人に伝えていきたいです。友人や家族に、原爆が落とされたという事実を風化させないために、そして二度とこのような悲劇を繰り返さないために、私にできることを探していきたいと思います。

現地を訪れる前は、正直なところ、広島歴史は教科書の中の出来事だと感じていました。しかし、実際に平和記念資料館の展示物や、原爆ドームを目の前にした時、その考えは大きく変わりました。原爆が投下された当時の広島街並みを再現した模型や、被爆者の遺品、そして皮膚が垂れ下がったままの火傷を負った人々の写真など、強烈な証拠の数々が、過去の出来事を現実として突きつけてきました。

特に印象的だったのは、被爆された方々の手記でした。壮絶な体験を語る言葉の端々からは、当時の恐怖や苦しみ、そして大切な人を失った悲しみがひしひしと伝わってきました。原爆によって一瞬で日常が奪われ、人生が狂わされてしまった事実を、私は決して忘れることはできません。

この平和学習を通して、私は「平和」という言葉の重みを再認識しました。平和は、当たり前にあるものではなく、多くの犠牲と努力の上に成り立っているということを。そして、その平和を守り続けるためには、私たちが歴史を学び、教訓を未来へ語り継いでいかなければならないのだということを。

私はこの経験を、まず身近な友人や家族に話すことから始めたいと思います。そして、学校や地域の活動を通して、より多くの人々に伝える努力をしていきたいです。二度と悲劇を繰り返さないために、そして平和な未来を築くために、私にできることは何なのか。これからも、その答えを探し続けていきたいと思います。

80年前の8月6日、相生橋を目標にしていたが160メートル離れた病院に原子爆弾が投下されました。私は研修に参加して、特に2つのことに驚きました。

まず、原子爆弾は主に3つの要素で被害をもたらしたことです。1つ目は熱線。爆発時に発生した熱で、爆心地付近では3000度から4000度にまで達して人体を焼き尽くし、建物は火事になりました。2つ目は爆風。原爆は空中で爆発し、高圧の空気の壁といえる衝撃波が発生しました。吹き飛ばされて失神した人、負傷した人、倒壊した建物の下敷きになって圧死した人が相次ぎました。3つ目は放射線。爆発と同時に放出された大量の放射線は、人体の奥深くまで入り、細胞を破壊し、深刻な障害をもたらしました。放射線による障害は被爆直後だけでなく、白血病やがんなどのように何年も経って症状が現れる場合もありました。

そして、私は被爆者の佐々木禎子さんが印象的でした。禎子さんは2歳の時に爆心地から1.6キロメートル離れた町で被爆しました。家は一瞬で倒壊しましたが禎子さんは奇跡的に無傷でした。その後元気に成長しましたが、小学6年生の時に突然白血病を発症しました。入院してすぐ、禎子さんの持ち前の明るさで看護婦さんや他の患者さんと仲良くなりました。しかし、手足や首に青紫の斑点が出始め、症状は悪化していきました。折り鶴を1000羽折れば願いが叶うと聞いた禎子さんは、病気が治ることを願って薬の包み紙などで鶴を折り続けました。その願いは叶わぬまま8ヶ月の闘病生活の後12歳で亡くなりました。この悲しい知らせを聞いた同級生たちは、お墓か記念碑のようなものを建てたいと、原爆の子の建立運動が始まりました。運動を始めて2年半後の1958年5月5日、各地から寄せられた募金によって、「原爆の子の像」が建てられました。禎子さんと折り鶴の物語は報道や出版に取り上げられ、世界中に広がりました。今でも原爆の子の像に平和を願って多くの折り鶴が捧げられています。

社会の授業で原爆が長崎と広島に落ちたことは知りましたが、広島平和記念資料館に行ったことで、原爆が落とされた場所や理由などたくさんを知りました。また世界中が平和になるために自分にできることも考えました。被爆者の方々の人数が年々減っていった中、今を生きる私たちがこの悲惨さを知ることが大切だと思います。だから、家族や友達にたくさん話をして、伝えていこうと思います。

私は今回、藤枝市の広島平和記念式典派遣事業に参加し、戦争や平和、そしてこれからの未来について深く考える機会を得ました。

初日に訪れた平和記念資料館では、原爆による被害の大きさや当時の人々の苦しみ、写真や実際の遺品を通して強く伝わってきました。爆心地近くでは、何もかもが焼き尽くされ、日常を生きていた普通の人々が一瞬で命を奪われたという事実、言葉では表せない、なんとも言えない気持ちになりました。

その後に参加した被爆体験記朗読会では、「ヒロシマの空」という林幸子さんの詩を朗読していただきました。家族が一人、また一人と亡くなり、最後にはひとりぼっちになってしまったという詩の内容からは、想像を超える悲しみや苦しみ、怒り、そして深い失望が伝わってきて、心が締めつけられる思いがしました。最後の一文「うつくしく 晴れわたった ヒロシマの あおい空」は今も心に残っています。林さんがなぜその空を「美しい」と表現したのか、本当の気持ちはわかりませんが、空だけは変わらずそこにあり、「絶望の中でも生きていくしかない」と語りかけているように感じました。

被爆された多くの人々は、深い悲しみや苦しみを抱えながらも、一生懸命に生きてこられたのだと思います。中には今も苦しみ続けている方もいます。その現実を忘れずに向き合うことが、私たちにできる第一歩だと感じました。

原爆死没者慰霊碑に刻まれた「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」という言葉には、強い願いと決意が込められており、それが今の平和な広島に姿につながっているのだと思います。

2日目に参加した平和記念式典の終盤で歌われた「ひろしま平和の歌」の「手をさし伸べて その睦み ここに歌わん」という歌詞には、平和や友情を世界中の人々と分かち合い、協力し合っていこうという思いが込められています。

私は、過去の悲しみに真剣に向き合い、現在の社会をしっかりと見つめながら、この事実を忘れず、次の世代に伝えていく責任があると強く感じました。

活動の記録



広島平和記念資料館見学(8月5日)



広島平和記念公園見学(8月5日)



広島市平和記念式典(8月6日)



全国こども平和サミット(8月6日)



藤枝市戦没者追悼・平和祈念式典(8月15日)

代表 2 名が感想文を朗読



藤枝市

令和7年度 中学生広島市平和記念式典派遣事業 感想文集
発行:令和7年8月

静岡県藤枝市岡出山1丁目11番1号 藤枝市総務部総務課